

# 種実同定

植物に結実した種実が、堆積物中に残され化石になることがある。これらの土壌中より抽出し種類を同定することにより、当時の植物の情報を得る。河跡など低湿地で検出されたものは、当時の周辺植生を反映しており、当時の古植生を探る上で重要な情報源となる。また、副葬品や食料貯蔵・残渣として検出されることも多く、人間の生業に直結した情報を得ることが可能となる。湿地堆積物などは、水洗法によって豊富な種類数・個体数の植物遺体が検出される事例が多い。一方、台地では炭化種子などに限られるため、人為的に炭化を受けた栽培植物等に着目した分析には有効であるが、周辺の古植生の推定には不適である。

植物の分類は基本的に生殖器官で行う場合が多いため、種実同定は、花粉化石や木材などと比較して、より細かな同定ができることが長所である。一方、多量に出土しないので定量化が難しいこと、微化石よりも検出される地点や層位が限られること、多量の試料が必要なため、ボーリングコアなど少量の試料では分析できないことなどが短所である。

微化石も含め、さまざまな部位の化石を分析するのは、上記に挙げたようにそれぞれの化石が持っている得手・不得手を補い合うためである。たとえば、木材では草本の情報は得ることができないし、植物珪酸体ではイネ科以外の植物に関する情報は少ないまた、花粉化石はより広域的な植生を、種実や木材は調査地点に近い局地的な植生を反映する場合が多い。そこで、様々な化石を使って、総合的に古環境を復元する。



栽培植物

エゴマ    トウガン    ヒョウタン類    メロン類    ナス    イネ    コムギ

可食植物

オニグルミ    カシ類    クリ    キイチゴ属    マタタビ属    ブドウ属    ヤマグラフ

水生植物

タカサブロウ    ホタルイ属    ホッソモ    サジオモダカ属    イボクサ    ミズアオイ属    ヒルムシロ属

